

シンポジウム「受委託組織による良質粗飼料生産の現状と展望」

総合討論

**司会・松中** (酪農学園大学) 4人の方から大変素晴らしい御報告をいただきました。今日のお話を聴いている限り、コントラもTMRセンターもバンバンやっつけていけるな、という気分させられたのですが、本当にそれで上手くやっつけていけるのか、あるいは、これからの酪農にとってTMRセンターやコントラがどんな役割があるのか。最初に会長がおっしゃられたように、受委託生産というものが飼料自給率の向上にどのような役割を果たすのか、ということについて議論していきたいと思います。まず最初に、阿部さんと原さんの講演については確認の為の質問の時間を取らなかったのも、もし何かございましたら出して頂きたいと思います。

**佐藤** (根釧農試) 原さんにお聞きしたいのですが、地域では若い人がどんどん出て行く一方なのですが、TMRセンターができて雇用が出来ることによって、そこが地域のコアになって若い人が就職できる、といった効果が出てきているように思うのですが、地域に人を残す、後継者や弟を残す、という効果は出てきていますよね。

**原** 中標津の場合は5人雇うことにしまして、基本的には後継者を雇います。何故かという答えは簡単です。その農家さんをよくしたいという気持ちもありますが、全体で4億のお金を動かすわけで、普通知らない人がそこの中に入っていると変なことを想像しますよね。後継者だと逃げない、逃げた場合は親が責任をとる、ということもあります。このように農家さんには説明しています。基本的には地域の人材は地域で育てて使う、こう言っても農家さんは理解してくれないので、さっき言ったように、担保だから、というような言い方をします。佐藤さんが言われるように、地域としてはこれからは自分たちで息子を育てないといけなけれども、親が息子を育てるのは難しいので地域全体の大人が後継者を育てる、ということで、年明け早々に後継者を集めて関係機関が指導する予定です。

**司会** よろしいですか、他にございますか？

**近藤** (北大農学部) 原さんの一番最初のスライドにあった加盟18農家の概要を見ると、放牧を上手くやっている農家が何件かありましたが、その農家がTMRセンター設立

後にどうなったのか、ということをおしえて頂きたいのですが。といいますのは、ご存知だと思うのですが、地域によってはTMRセンターの設立と、もう一方の自給飼料の効率的な使いかたの例である放牧とが、本当はそんな関係になるはずがないのに対立事項になっている地域もあります。この例ではどうなのか教えてください。

**原** 放牧をやめるというのは農家さんにとっては非常に技術的にリスクなことになりますので、センターとしては、そのまま放牧をやっつけて下さい、といいます。センターは朝夕2回配送という形をとっていますので、夏は朝供給しないで夜供給しますので夜の分を夜と朝食わせて下さい、半分にでも3割でもいくらかでも量を調製します、と説明します。放牧農家さんは草地在りですね。そういう意味では、草地を維持する為には放牧を続けてもらった方がいいですし、6件が放牧をやっているんですが、多分そのまま放牧はやり続ける方が多いと思います。特にセンターで対処に困るということは想定していません。

**司会** よろしいですか？

**近藤** 現実にはTMRセンターとしてはおっしゃるとおりですが、農家にとっても売って買うわけだから、冬については間違いなくそれでやるので全く問題ないはずなのにも関わらず、TMRセンターが介入すると申し訳ないから放牧をやめて全部センターに切り替えようか、という動きが出てきてしまうようなのですが、その辺どのように考えたらいいのかと思ひまして。

**原** 細かい計算をしてみせるんですけども、他の方はセンターの売る量がきちっと決まらないので放牧やめて欲しいといいます。放牧をやると夏の供給量が少なくなりますからセンターの稼働率が若干下がる、という事にはなるんですけども、そんな細かい事を言うんじゃない、まず、牛を健康に飼って乳量をのばすのがセンターの目的なんだから、と農家さんに説明して回ります。そういうことであれば、まあいいよ、センター全体で儲かる、農家が全体で儲かるのであればいいよ、となるように説明します。

**金田** (日高東部普及センター) 阿部さんに1点お聴きした

いのですが、根釧農場試験場の経営科で10年か5~6年前に牛乳の生産費を調査した結果、牛乳の生産費の違いは自給飼料の違いによるところが大きい、購入飼料よりも自給飼料の生産コストによって大きく影響される、ということが明らかにされています。阿部さんの発表の2つの成果の中で自給飼料費が低減したコストが下がった、と言われておりましたが、TMRセンターを導入する前の牛乳の生産原価と、実際に設立して3年経過しているんですけども、その中で牛乳の生産コストが何%ぐらい下がっているのか、その辺の検証をどのようにしているのか教えていただければと思います。

**阿部** 牛乳生産費だけでは整理していません。先程グラフにも出しましたが、購入飼料費と自給飼料費の中でパーセントで表しただけです。今手元にはそれしかありません。

**司会** よろしいでしょうか。それでは個々の発表に対する質問をこれで打ち切りまして、4つの課題について議論に入っていきたいと思います。最初に、私この4つの話を聴いてすごく印象に残ったのは、最初にも申し上げましたように、皆、上手くいった、良質な飼料がたくさん採れたとおっしゃっています。お一人ずつで結構なのですが、それは、結局、何故そうなったのか、もちろんそれはコントラにしたから、TMRにしたからが原因ですけれども、コントラにしたことによって何がどう改善された為に良いものが沢山採れるようになったのか、という事をご説明頂きたいのですが。

**五十川** 今の御質問ですけれども、牧草の収穫・調整の面では機械の能力が改善されてきた事が一つあります。また、牧草の水分が80%近い場合はギ酸を入れて、調製後のpHは4.0になるようにしています。天気の良い時に調製する事が一番良いわけですけれども、それに合わない時はギ酸を使ったり、乾き過ぎる場合は乳酸菌の添加を試験しています。乾き過ぎて、しっかり踏み込むのもままならないようなところで乳酸菌を使ったら2次発酵を少しでも抑えることにならないのかな、というような事も検討しています。また、不耕起の播種の関係では、原さんの所で今年200ha播かれた所を春見に行きました。すごく衝撃的であります。根釧で200ha作る、それも全層施肥で全部作られています。十勝でとうもろこしを播くには、畝の種の横に2cmか3cm、もしくは5mの所に肥料を落としていくのを当たり前に思っておりました。コントラで作業を沢山やっていく上では、全層施肥でどんどん肥料を播いて種だけどんどん播いていけば、畑に持って行く機械は1台でも減らせる

ので大変興味がありました。今日の発表を聴いて上手くいった、ということがわかり、また新たなテーマになるのかなと思っております。そのようなことを、一つ一つ手掛けさせて頂いて、また、地域の普及センターの人等にアドバイスを頂いて、それが技術として地域に定着してきています。農家個々の時にはなかなか全員が揃って、ということにはならなかったのですが、コントラにそのような技術がだんだん蓄積しますと、安定した技術となり、地域的にそれが当たり前の技術に波及していく、コントラクターを利用してない人も真似をする、というような事になりますので、そういったことが全体のレベルアップに繋がっていくのではないかと思います。

**司会** どうもありがとうございます。

**阿部** 一番言えるのは適期に収穫出来るようになったということです。従来2~3週間かかった収穫が10日以内に終わる、ということだけでもまずは一つ大きな成果だと思っています。また、TMRセンターになってから草地更新が所有面積の50%を超えています。もう一つに、土壌診断も実施してきています。それに合わせて全圃場に炭カルかライムケーキ、どちらかの土改材を散布するようになってきています。一番は、管内初めてですから非常に注目されたという事で、皆さんの意識も非常に高かったです。新たな取り組みという形で何かを提案すると、今までは、うーん、と二の足をふんでいたんですけども、いいか悪いか分からないけど取りあえずやろう、という意識に変わってきているのが非常に大きな成果と思っています。

**司会** どうもありがとうございました。町さんの方では、コントラやTMRセンターの組織化でご苦労なさっていますけれども、そのへんの苦労話等がありましたらどうぞ。

**町** 冒頭ちょっとお話したように、私は昨年7月からこちらの担当になったものですから、昔の詳しい経過は五十川課長さんとか谷本部長さんがよくご存知なので、そのへん五十川課長お願いします。

**五十川** コントラクターといっても、うちは農協事業の中でやらせて頂いておりますが、各地区様々な形態でやっておられます。農家で会社を作られていたりとか、業者の方がやられたり、というようなことで、様々な形態の中で様々な方々が携わっている中で調製技術を伝えいくというのは、なかなか難しいことだと思います。うちの場合は農協事業ですので、関係機関に対する指導事業の部分にす

んなり入っていただけますが、土木業者さんだったり、そういう方々が調製するところでは、どうしてもコスト的なことが優先して仕事を一気にやってしまう傾向があります。飼料調製の基本的な部分の意識改善をしていかないとなかなか難しいと思います。研究会でもそれをテーマにして土木業者さんと呼んで、そういうところにも意識してもらうような事で執り進めてはいるんですが、コントラの作業に携わっている人全体に、そういった意識を持たすという事は結構大変なことではないかと考えています。

**司会** どうもありがとうございます。この4つのお話を聴いて、こんなにすごいならどんどんやればいいのではないか、という感じで思っていたのですが、なかなかそう簡単な話ではない、というのは原さんが熱弁をふるわれたので良く分かるんですが、やりようによっては結構やっていけるんだな、という印象を持ったのですが皆さんはいかがでしょう？

**原** 非常にうまくいっているというように聞こえたかも知れませんが、そういう気持ちも少しはあるんですが、こういうふうになくなって一番心配してる事は外作業を土建会社に発注してる点です。ここまで大きくなってその土建会社が潰れたらどうなるか。潰れるのはだいたい12月とか3月です。その時期に潰れると、春作業までに新しい組織を作らなければいけないし、新しい会社と契約しないといけない、それが一番大きなリスクです。それでは、会社ではどうするかというと、その土建業者が抜けられないようにします。その業者がこの会社の外作業を請け負うことできちっと利益が出るように、春から秋までの仕事を全部作ってあげます。そういった工夫をしないと、公共事業が戻ってきた時、公共事業の方が単価高いからそっちをやる、と言われたら困ります。会社に農業部を作って頂いて、この農業部で農業関係の仕事をしてもらう。ですから、農業部の3人の職員の給料をきちっと皆で出せるぐらいの仕事が発注する体制をとらないと、公共事業と農家さんの作業どっちがいいかという判断になりますので、その変は発注する側も気をつけないといけないような感じがします。我々の一番の大きなリスクはそこです。

**阿部** 今日の発表は少し言い過ぎたかもしれませんが、組織を作って1~2年というのは、会社の経営も非常に大変だということと、会社に出ることになりますから時間から時間、拘束されるという事で負担は確かにありました。従来、長期間に渡って収穫作業に関わっていた人が短期集中するという事で、ほとんど経営者が外で作業してしまう

ため家族の負担は非常に大きいものでした。最近こそありませんが、スタートして1~2年は家族の人から「夜遅くまでやらないで早く1日の作業切り上げるように言ってもらえないか」といった電話まで来ました。最近になって経営も軌道にのってきましたし、会社のシステムを家族の皆さんが十分に理解してきましたので、そういう面ではだいぶ落ち着きが出てきました。

**司会** どうもありがとうございます。他に御意見ございませんか。

**竹田** (上川農試・天北支場) 少し話しは変わりますが、シンポジウムという課題や難問などで終わった後もすっきりしない事が多いんですが、今日は前向きな話が多くて良かったと思っています。草地研究会という事もありお聴きしたいのですが、今まで農業試験場では自己完結型の個人経営を前提にした技術開発を進めてきました。ただ、TMRセンターのように生産単位として1000haとか場合によってはそれを超えるような生産単位ができてきているという事で、今までの技術がそういった大きな生産単位の中でどう生かされるのか、或いは不足しているところが何かあるのか、という事が気になります。もちろん適期刈りができる等いろいろメリットとしてありますが、生産単位が拡大する事によって新たな別の技術的課題が出てきてはいないかどうか、そのあたり何かお気づきの点がありましたらお願いしたいと思います。

**五十川** 先程もありましたように、各作業においてコスト低減に繋がるような取組みが必要だと思います。もし、十勝でもとうもろこしが全層施肥だけで同じような収量が採れるのであれば取り組んでみたいと思いますし、昨日の発表では追播の話も出てきました。うちも実際、追播機を使ってやってみたのですが、やはりマットの所で乾いて生えなかった事がございまして、なかなか追播をするタイミングというのは難しいと思っています。その辺のリスクがはっきりわかってくると、こういう時はできない、こういう時はできる、ということで農家サイドにアドバイスをしながら追播技術などにも取り組んでいけるのかなと思っています。どうしても面積をこなしていきますので、その中でコスト低減に繋がる技術という部分を追い求めていくことになります。不耕起栽培や追播の牧草の維持という事もテーマになるのかなと思っています。

**司会** どうもありがとうございます。

**阿部** 私の方も同じですが、コストをかけないですむ方法というのが農家の皆さんから言われていることです。現場では、技術が明確になる前に取りあえずやってみようといった挑戦が起きてまして、それによって失敗したことが良い事、悪い事の判断になっていることも多いようです。ここのデイリーサポートセンターでも早くに追播をやってみたのですが、何も分からずやっていたという形で、やってみただけやっぱりダメだったということが3年くらい前にありました。現在では追播マニュアルなどが出来ていますが、もう少し早く情報をあげていただければリスクが大分回避できるのかなと思います。

**原** 今までよりは大きな単位が使いやすいと思います。今までですと1つの技術ができて1件の農家さんでそんな細かい事まではできませんでした。仮にやってみて、良い草が1部だけ出来ても餌設計では非常に使いづらい、ということになります。ただ、大きな単位ですといろいろ取り組めることがあります。大きな単位で、例えば18戸の社員に説明しますと皆いろいろとアイデアを出してきます。試験設計そのものについてはあまり言う立場ではありませんが、現物規模いくら、10何円とかいう形で全部計算を起こしますから、もうちょっと試験の比較対象の幅を狭くして欲しいと思います。望ましい投入量の対策を考えますと、投入量の半分を対象、その2倍を対象としてやられる試験がけっこうあります。そういうのが出ると、真ん中が答えなんだなというのが何となく分かるんですけど、こういう大きな会社からいうと、例えば100というレベルで設定する場合、50と150というふうに試験を組むのではなくて、80と120で3つやったがどれも同じだったというのが一番望ましいわけです。そうすると使う側は80でも同じ成果が得られるんだな、というように判断します。試験がややこしくて成果が見えなくてイライラするかもしれませんが、大きな組織というのはそういうような考え方をするのではないかなと思っています。同じ効果がどこまで資材費を下げていつて出るのか、という面も研究して頂ければと思います。

**五十川** ふん尿の関係なのですが、堆肥をこれだけ散布すると肥料はこれくらい減らしてもいい、というようなことがまだわかりにくい状況があります。今、土壌診断等やりながら進めてはいるのですが、基本的に、スラリーを何t入れたらどれくらい減肥ができる、といったことを皆が言えば直ぐわかる、ということまではいっていません。大変複雑な部分ではあるんですけど、そのようなところが農家の方々に説明しやすくなると減肥の取り組みが進む

のではないかと思います。現況で行くと、土壌診断をして投入量を決め、またスラリーを分析して、という事でなかなかはっきりした答えがダイレクトに農家の方に伝えられないので、そういった事がもっと伝えやすくなればいいなと思っております。

**司会** どうもありがとうございます。

**中山** (寒地土木研究所) 十勝や根釧といった大規模圃場が整備された地域で大型機械を入れて効率がどんどん上がって行くという事はすごく理解できたのですが、こういった成功例を全道の方が見て、私達の地域でも取組んでいきたいなと思った時に、それぞれ地域によって飼料生産条件など異なりますが、TMRセンターを選択したら効率が上がって行く条件を区分けする事は可能なのでしょうか。試験場として取り組んでおられるのか、それとも、これからやられる予定がありましたら教えて頂きたいと思います。

**原** 全体的には経営規模が小さくて圃場面積が小さい農家さんが沢山入ってるコントラやTMRセンターはやはり少しコストが高くなります。それから、圃場が分散していると移動に結構時間がかかりますので相対的には大分餌代が高くなる、という現実もあります。ですから、その地域の状況にもよりますが、まず交換分合出来るかという事になります。それから、圃場を大きくするというのは難しいかと思っています。というのは、大きくする投資と大きくなった時にどれくらいコストが下がるのかの比較になりますが、圃場を大きくする投資額があまりに大きいと、自給飼料の餌代が5円、10円下がっても10年くらいはカバーできないという可能性もできます。ですから、大きくする手法、低コストな手法を是非寒地土木研究所さんの方で少し考えて頂きたい。今までのやり方で規模を大きくする圃場を大きくするのは全体を見ると非常に厳しい。大きくしたいという気持ちはもちろんあるんですが、ではいったいどんな方法で、という事になります。宿題を返したように申し訳ありません。

**司会** どうもありがとうございます。他にございますか。

**奥村** (北農研センター) 私、牧草の新品種の開発に携わっています。今回のシンポジウムの皆さんのお話を聞いて、最後原さんのお話でもありましたが、新品種を含めて私達が開発した技術の普及について、ある面では計算し尽されている感じがしています。特に、コストですとか価格的にも非常に計算し尽されているというのと、もう一つは

アメダスのデータ等も最新のデータを使っているという事で、そういった意味でも計算し尽くされている気がします。これは私達から見ると、非常に分かりやすい技術開発というのは、今まで個別の農家さんの単位だと浸透しにくかったんですが、こういうメリットがある、それを何らかの形で計算していけば、こういう大きな単位、先ほどの根釧農試の露地栽培のとうもろこしの例のように、非常にある意味ではチャレンジして頂ける機会が増えたような気がします。そういうふうな理解で、以前よりも開発した技術がきちとしたものであれば普及しやすくなったと思ってよろしいでしょうか？

**原** 技術そのものについては、うちは全部作物科の判断で見込みがあるかどうかをみて頂いております。当然品種を扱っている所ですから、広めたいという気持ちもありますが、それを経営科の方で皆と相談して、こういうコストになる、というのを計算してみてもやるやらないの判断になります。たいていの場合、現場に張り付いている研究員が見込みあり、と言えだいたい計算しなくても現場に入っていきますが、一応念のためにきちっと計算してみます。ですから、やりやすいと思うんです。こういう物が出ただけで、現場に入るかどうかの判断を入れる前に一回計算し尽くしてしまいます。結果、見込みがあると思ったら気合を入れて現地に何回も行ってもらいます。

**司会** どうもありがとうございます。他にございますか。

**義平** (酪農学園大学) TMR センター等の将来の方向としてこんな事が考えられるのかな、ということをお聴きしてみたいと思います。現状、粗飼料はほぼ自給していますが TDN の高い飼料はやはり購入していますが、将来何処かで TDN の高い飼料を作った場合、TMR センターがそれを買ってくれる受け皿になれるかどうかということです。実際は海外からの購入飼料が安ければ難しいかもしれませんが、空知、上川辺りで遊んでいる水田がありますので、そこで TDN の高い餌を作り、畑作農家兼餌作り農家、水田農家兼餌作り農家ということで成り立ち、作られた餌が根釧に入っていく、ということを考えています。そういった形で濃厚飼料の生産を考えた時に、TMR センターがそれを購入する受け皿に将来なる事ができる可能性があるのかどうか、という点についてどなたでもけっこうですがお願いします。

**阿部** 発想としては非常に良いと思いますし、今でもデントコーンなどもロールパックにして販売が始まっている

という話しも聴きます。現地着でのコストさえあれば、それは多いにあると理解していますが、現状、餌代より運搬経費の方が高いようなので、それをクリアする方法が何か出てくればあるのかなと思います。

**司会** よろしいですか？

**義平** 原さんどのようにお考えでしょうか？

**原** 経済屋の答えは厳しい答えがでるなという感じがします。今言われたように、裁断型ロールでバックして持ってくる。肉牛農家さんは買ってきますので、充分ペイするなという感じはしますけども、日勝峠を越えるのはなかなか運賃が厳しいと思います。まさしく言われるように、センターに着いていくらという勝負になると思います。ただ、コーンの価格が上がってきています。たぶん下がる見込みは厳しいので、それとの兼ね合いになると思います。

**司会** どうもありがとうございました。

**山川** (上川農試・天北支場) 義平さんのお話の実例を少しお話ししたいと思います。手塩町や愛別町辺りでは、とうもろこしのロールパックを作って何とかしたいというグループがございいます。一つのグループは土建屋さんのソフトランディング見たいな感じですし、もう一つの愛別町の方は水田の転作を利用して何か出来ないかという事で、とうもろこしを作って売りたい、というところであります。もう一つの例では TMR センターで畑を沢山用意してとうもろこしを作ったんだけど、こういう情勢で牛が食うまでいかないので売りたい、というようなことです。わりと私達の近くのトラックは肉牛屋さんには向かっている状況にありますが、酪農家に向かっていくにはもう少し時間が必要かなと思います。ただ、天北のように殆ど草ばかりの状態ですと餌のバランス的にはどうなのかな、というところがあります。特に、放牧をしていて草地をだんだん良くして行くと、夏以降ちょっと栄養バランスが悪くなります。そういう所ととうもろこしをいれて貰う、スポットでいれて貰う、というパターンがあるかと思います。そういった事を意識して、来年から保存性の問題や、天北の牛は初めてとうもろこしをみるので馴致も含めた試験を実施していく予定です。

**司会** どうもありがとうございます。

**青木** (北農研センター) テーマである受委託組織による良

質粗飼料生産と聴いた時に、まずピンときた事は大量調製における踏圧不足で良いサイレージにならない事が多い、それに対する対策をどうしたらいいかな、ということを僕ら技術開発屋としては回答を見つけるべきかなと思っ  
ているところ。どうなのでしょう、やはり高水分であれば 2 次発酵が起こりにくいから発酵品質は多少目をつぶる、あまり水分が高ければギ酸を添加してやろう、或いは逆に乾きすぎてふかふかになってしまったら乳酸菌を添加しさえすればいいんでしょうか、それとも何か他に我々としてやるべき事があればセッションを頂きたいと思  
います。

**司会** 五十川さんよろしくお願ひします。

**五十川** 良質粗飼料を調製するというのは毎年毎年の天候もありますし、その中で 1 年 1 年変化していくものかなというふうに思っております。本年については十勝の天候は 6 月の牧草収穫のピーク時に悪く、収穫が 7 月にずれ込む場合がありますので刈り遅れた状況の中での作業となりました。去年、一昨年と過去 2 年については比較的良好な天気の中で調製作業ができたと思ひます。1 年 1 年の課題という事になると思ひます。また、踏み込みの関係については、平成 16 年ぐらいに農協連の古川さんにバンカーの密度調査をして頂きました。その中で適正な密度とはどういう事なのかを我々もう一度認識し直しまして、全体的にみてコントラの作業では密度が足りているのかいないのか、ということその時から考えるようになりました。その後、研究会の中で踏み込み作業をテーマに取り上げながら自分達の作業体系を見直してきている途中です。踏み込み作業といっても各地区によってやり方が違いますので、本年の取組みの中では、踏み込み作業をビデオに撮り誰もがみれるような形にして、どうい  
う作業がいいのか各方面から意見を貰い、その中でいいものを探していくという形でとり進めております。道のコントラ協議会とも連携しながらコントラクターの作業 DVD ができるんですが、そういったものを皆で見ながら、また、いろいろな意見を拾い改善できるものは改善していきたいと思  
っております。添加剤を使うのは最終的な手段だと思  
っております。やはり、何も使わないで良質な物ができるのが一番ベストだと思ひますので、それを毎年目標にしながら進めて行く、という事になるのではないかと思ひます。先程、写真の中にアグバックがりましたが、タイヤシヨベルで踏むのが工程の中にあつたんですが、ああいう機械を使って詰めたらどうなるのか、という取組みもありますし、この他に私の知らないようなやり方がまだあるのかな

と思ひますので、皆さんのお力を借りながら新たな発見ができて、それに基づいて作業ができたらいいなと思ひます。

**司会** どうもありがとうございます。時間が大分迫っているんですが、今日議論しなければならないのは現状と展望です。皆さんのお話を聴いていますと、現状については個別的な基本技術というのは、個々の 1 件 1 件の酪農家でやる技術もコントラや TMR センターでやる技術もそれほど大きな違いは無いというふうには聴きました。もちろん、大きくやる事により多少の工夫は必要かもしれませんが、技術の基本というものについては今日の話題提供者の皆さんがおっしゃっている事は、我々が今まで基本として考えてきた事とそんなに大きな違いはないと思ひます。従って、現状としては組織化した TMR を立ち上げる事の大変さを乗り越えれば、コントラや TMR をやっていけそう、というような印象を持ちました。今後、あと少しの時間、展望の事について議論させて頂きたいと思ひます。何年か前に中標津でフォーラムをやった時に、当時の経営科長であつた岡田さんが、皆さん一生懸命研究されていますけれども酪農家の戸数の減り方はご存知でしょうか、気が付いたら酪農の研究やってる人はいたけど酪農家がいなくなるという現象がおこります。その為にはバックアップを取らなきゃだめです、というような事を提言されました。その提言の一つとして、今日あるコントラや TMR センターがあると思うんです。そういう意味では、これからの酪農を支えていくために大きな役割を持っていると思ひます。しかし一方で、ふん尿撒きから飼料生産の作業まで外注して、自分は与えられた TMR を個々の乳牛に供給して生産量を上げていく、というような搾乳屋さんになってしまい、飼料の生産と搾乳という事が分離されてしまうのではないかと心配もあります。こういう事について、実際にやられている皆さんは将来どうい  
う展望を持って、いやそんな事はない、ちゃんと酪農家とタイアップしてうまくやっていますよ、といったポジティブな、私を元気にさせて頂けるようなご意見を聴かせて頂きたいのですが、町さんからどうでしょうか。

**町** ちょっと最初からネガティブな発言になってしまうかもしれませんが、今、十勝管内の酪農家、搾っている方が 1,700 弱の戸数があるんですが、これが 5 年後には更に 100 近く減ってくるのではないかと思ひます。この傾向はずっと続いていくと思ひます。実はこれからの 5 年間で酪農家が最も考えなきゃいけないことは、いかにしてコストを減らすかという事だと思ひます。今年の夏に TMR センターの取組みの意向について各農協に聴いて回

った時に、この間までは5年後に向けてTMRセンターを考えていたんだけどもそれどころじゃなくなった、という農協さんもありました。できても管内であと1つか2つぐらいしか増えないんじゃないかというような状況でした。今、乳価が補給金入れて70円ぐらいですけども、これが5年後には65~66円、もしくはもうちょっと下がるかもしれないといった中で、十勝に限らずかなりの酪農家さんが淘汰されてしまうと見ております。その減った分の生乳生産を大きな所、力のある所が賄っていくというような状況になっていくのかなと思います。それからもう一方で、政策として畑作で来年から品目横断という政策が入りますけれども、酪農についても多分EU型の農政を踏襲していくとなれば、やはり環境に配慮した1haあたり2頭しか飼ってはいけないといった政策が導入されて来るのではないかと考えております。そうなった時に、十勝管内に22万頭ほど乳牛いますが、これを25万ha、そのうち畑地が12万haぐらいありますから、12~13万haの草地で維持していく、もしくはそんなに飼ってはいけないというふうになるかも知れません。これまでも政策支援としていろいろとお金が出ておりますが、海外の貿易の自由化が進んでいく中で関税が撤廃されるというような事が起こってきますと、やっぱりそれは国民の税金で支援しなきゃいけないという考えになっていくんだと考えております。その後、納税者負担で環境にも配慮した生産をしなさい、という事がいよいよ強いられてくるのかなというふうに考えております。それを乗り越えて力のある農業をして行かなければならないと考えております。

**五十川** 鹿追では、すべての支援組織は揃ったとっております。コントラクターや哺育育成などハード的には支援する部分は揃って来ました。ただ、今それを利用されてる方々は個人の家族労働の中から現在に至ってきたという背景にありますが、後継者の方々はそういった便利な組織があるのが当たり前であります。その当たり前というところから始まる農業は如何なものかなと考えております。今後の一つの課題としては後継者の方々をどのように育成するか、そこが大きな課題になってくるのかなということを考えています。コントラクターが急に動かなくなったら営農ができなくなる、哺育が無くなったらできない、というような異様な事が起こらないとは限りません。そのような事も考えた、たくましい後継者づくりが当面ここ10年の間にしっかり考えておかないといけない事ではないかと考えております。

**阿部** デントコーンの播種作業、除草剤の防除作業という

のは意外と後継者はまるっきり触っていないもので、どちらかといえば60代、70代のお父さん達がまだ現役であります。その時期に巡回していると頭数が拡大したという事で後継者のほとんどが牛舎作業になってきつつあります。そういった点がちょっと気になります。今はまだ60代、70代の方がおりますが、5年10年先をみると非常に危険ですので、スプレーヤー作業や播種作業等も含めた支援対策が必要かなというふうに感じています。ただ、それだけでは解決しない問題も出てきております。畑作業の外部化が進むと、日々の草地管理というか畑を廻る機会が非常に薄れてきていて、回りの人から「あの畑おかしいぞ」という指摘があって始めて気づく、といったことが起きておまして、規模拡大によって出てきた弊害かなと思っています。ですから、それを含めた支援体制が必要なのか、もう一度自給飼料の見直しをかけてもらうような体制づくりを進める必要があるかと思っています。

**原** 多分、農家さんは草地を見られなくなるのではないかと考えています。それを予防する為には農家さんの代わりに草地を見られる職人を育てるしかありません。今、根釧農試と別海農協で農協で職人を育てられるかということを実証していますが、いけそうじゃないかと思っています。そうなりますと、皆さんは草地の職人に対してどう技術提供をするか、ということになってきます。今までは農家さんが相手でしたが、農家さんは聴いてもいろんな事はやっぱりできません。難しい所もあるんですが、酪農専門地帯ですと職人を作っていく事が多分できると思います。そういう職人に対して、草地を上手に使うという技術を多分皆さん作ってくると思います。それをこなすのが地域の町の職人、それはもしかしたらコントラクターの中に入ってるかもしれない農協の職員かもしれない。だけれども、そういう方を相手にするので、それなりに厳しい条件を付けてもこなしてくれます。今までの農家さん相手とは違って、きちっとやれる方を対象にどういう技術を出していくか、という発想が必要かなと思いますし、我々の地帯としては是非そういう職人を助けるような技術を出して頂けるかな、というふうに思っています。

**司会** どうもありがとうございます。私がこの世界に入った時は「土作り、草作り、牛作り」と言われ、それができないと酪農家ではないということと言われました。今、こういったTMRやコントラクターの成長が続くと、そういう昔の酪農家作りというのはまた違った酪農家作りを考えなければならぬ時代に入っているのかも知れません。でも、昔は良かったな、昔の方がいいのかな、という

思いもあります。本当は最後にそういった点についてまとめた意見をお聴きしたかったんですが、私の愚痴みたいな話を最後にしてこの会を終わりたいと思います。ただ、展望は暗いのではなくて明るい展望を我々が作っていく、その為に我々が果たしている寄与率は半分以上だと昨日山口さんもおっしゃっておられました。我々はもっともっと自信を持ち、これからの酪農畜産の為に一生懸命やっていきたいと思います。その為に我々の方で技術開発ができるのであれば多めにTMRセンターやコントラクターで使って頂きたい、というふうにお話ししておきたいと思います。今日のご協力どうもありがとうございました。4人の方に拍手をお願いします。